

【新小学1年生の入学試験について】

Q1 新小学1年生の面接試験はどのように行いますか。

1グループあたり10～12人程度のグループで教室に入りミニ授業形式でグループ面接を行います。所要時間は1グループあたり20分程度です。挨拶をしたり手遊びをしたりして楽しい雰囲気でも子どもの緊張をほぐしながら、指導者が全体に指示を出したり、面接官が個別に質問したりします。

Q2 新小学1年生の入学試験に、筆記試験はありますか。

グループ面接の中で鉛筆を持つ機会はありますが、文字を書かせることはありません。

Q3 新小学1年生の面接試験で、音読はありますか。

ありません。絵を見たりしながら口頭でお話する活動が中心となります。

Q4 子どもが泣いたり嫌がったりして面接教室に入れなかった場合、保護者が付き添うことはできますか。

保護者は面接教室の中に入ることにはできません。児童が泣いたり嫌がったりして教室に入れなかった場合は失格となります。母子分離ができていない子どもには大変不利となりますので、保護者と離れて、面接試験を受けられるようになっておくことが望ましいです。

Q5 子どもは恥ずかしがり屋で、初対面の人とは話ができません。それでも試験は受けられますか。

試験は受けられますが、面接の中で言葉が出ない場合は語彙がないと判断せざるを得ないので、恥ずかしがり屋で初対面の人と話ができない子どもには大変不利となります。また、初対面の試験官の声のトーンや話し方は子どもにとっては聞きとりにくい場合もあるかもしれないので、今から家族以外の人と会話することに慣れさせてあげてください。

Q6 新小学1年生の面接試験では、具体的にどのようなことを質問されますか。

具体的な質問内容はお知らせできませんが、[資料『入学試験の範囲・内容と求められる力』](#)のとおり、

- ①自分や家族について話すことができる。
- ②日常生活ですることを適切に話すことができる。
- ③相手の話を正しく聞き取ることができる。
- ④日常の生活場面で、相手に伝わるように物事を話したり、わけを話したりすることができる。

ということを確認するための質問や活動となっています。

質問や活動の内容は、日本語を母語として使用していれば決してハイレベルなものではなく、日本の幼稚園年長程度のものでお考えください。

Q7 新小学1年生の面接でも「です・ます」は使えた方が良いですか。

先生に対する話し方として使えることが望ましいです。

Q8 面接中に、子どもから先生に「ねえ、ねえ」と話しかけても良いですか。

グループ面接の中では、まず先生の話をしっかり聞いた上で話をするのが大切です。

Q9 グループ面接では、積極的に挙手して発言することが求められますか。

全体指導は一斉に行いますが、個々に発言を求めることはありません。個々への発問は児童2名に対し1名の面接官が担当しますが、その場合、発言の機会は各児童に対し均等に与えられます。

Q10 新小学1年生の面接試験や入学への準備として、今からどのような取組みをしたら良いでしょうか。

絵本の読み聞かせ

耳で聞いて言語を覚える力を養うのでお勧めです。言葉はまねをすることが習得の第一歩と考え、繰り返しの多いお話を選び、子どもと一緒に繰り返しの言葉を楽しみながら読むと良いでしょう。

読みながら、子どもがどのように理解しているかを把握するために、何が見えるか、誰が何をしているのかということをお話させたり、挿し絵に描かれている物の名前や言葉の意味を聞いてあげたりすると良いです。見たことがないものは、保護者が実物を見せてあげる、画像を見せてあげる等の支援も不可欠です。

読み終わった後にどんなお話だったかを子どもなりの言葉で伝える習慣をつけると、人にわかるように内容を説明する能力の向上にもつながります。

日本のテレビ番組を見せる

語彙力が向上し、日本語の文章の流れがわかるようになることが期待できます。読み聞かせと同様に、子どもに具体的な内容を問う質問をして、本当に知っているか、どのように理解しているかを確認したり、子どもの言葉でお話の内容を説明させたりというように取り組むと良いでしょう。

幼稚園などであった楽しいこと、困ったこと、友達とけんかしたことなどを話させる

親が子どもの言葉を先取りするのではなく、まずは子ども自身に話をさせて、子どもが言葉につまったら、こういう風に言えば良いという例を具体的に示してあげると良いでしょう。

英語で学んだ語彙が日本語では何というのかを教える

国語の語彙は低学年では具体的なものの名前が中心で、学年が上がるほど抽象的な語彙が増えていきます。英語と日本語をつなぐのは保護者の役目ととらえ、就学前からしっかりと保護者が支援をしていると、入学後もそれが継続できるでしょう。同様に、幼児語もできるだけ正しい言葉に置き換えてあげると良いでしょう。

文字に興味を持たせる

補習校での学習は時間が限られるため、ある程度読み書きができると学習が楽になるのは事実です。しかしながら、無理強い禁物です。かるた遊びをしたり文字表を壁に貼ったりするようにして、子どもが自分から興味を示したら、遊びを通してひらがなを読んだり書いたりするのが良いでしょう。

鉛筆を正しく持てるよう支援する

文字でも絵でも良いので、書くことに興味を持った場合は、鉛筆を正しく持てるよう支援してください。鉛筆を正しく持つことで運筆力が向上し、文字習得にも役立ちます。必ずしも入学前にひらがなの読み書きを習得しておく必要はありませんが、自分の名前だけはひらがなで書けることが望ましいです。

参考：[\[鉛筆の正しい持ち方\]](#)

単語の羅列ではなく、できるだけ文で話す

親と子の会話は語彙や表現に限られ、主語や目的語を省き単語だけで会話が成立してしまうことが多く、生活言語能力は身についても学習言語能力は身につけません。入学試験の面接では、単語の羅列だと日本語力が十分でない判断される場合があります、できるだけ文で話すことが求められます。家庭でも年齢に応じた言葉を用いて、「いつ・どこで・だれが・何を・どうする／どうなった」などの要素を含む文で話すように心がけましょう。また、できるだけ指示代名詞（あれ、これ、それ）の使用は避け、具体的に話すようにしてください。

家庭の中で日常的に日本語を使う

日本語を母語として学習していくためには、家庭での日本語環境を確保することが大切です。

小学生になる直前までは特に母語の確立が最も重要とされており、1日の起きている時間の半分より長く母語以外の言語に触れ続けることは避けるべきだという説もあります。とにかく母語としての日本語を使用する時間をできるだけ長くとることが大切です。そうでないと、本校に入学しても国語の教科書を学習し続けることは難しいですし、学年が上がるほど国語力の伸びに影響してきます。

英語や中国語を習得させるために幼稚園や保育園に終日子どもを預けっぱなしにしている場合や、日本語を解さないメイドさんに子どもを預けたままの場合、両親が日本人であれば勝手に日本語も育つと思うのは大きな間違いです。このような場合、日本人家庭の子どもであっても、日本語の発音や言い回し、助詞の使い方、形容詞や動詞の活用が不自然になる事例が多々あります。

親子の会話が英単語混じりにならないよう気をつける

海外生活が長くなるほど、保護者も子どもも無意識に英単語混じりの会話をしていることが多いです。外来語として日本語に定着している言葉は別として、外来語の発音についても、日本語の中で使用するときは英語的な発音ではなく、日本語として発音し、英語と外来語の使分けができることが望ましいです。この使い分けができないと、小学校低学年で学習するカタカナ表記にも影響がでてきます。

日本語学習の必要性を保護者が伝えるとともに、家庭での学習支援をしっかりと行う

言語の学習には「本人のやる気」が重要ですが、低学年の子どもにそれを要求することは難しいです。親子で楽しんで学習することで、幼いながらも子ども自身が必要性を感じ、学習継続の意欲となります。英語であれ日本語であれ、言語習得には時間がかかり努力以外の近道はなく、特に海外における日本語学習では保護者の支援が不可欠です。『家庭は第二の教室、保護者は第二の担任』ということを常に念頭におき、支援することが大切です。